

キャサリン ブロック カナダ出身の元キリスト教徒（上）

説明：

教養ある女性が、イスラームについて聞いたことと実際とのギャップ、そして神の存在について苦悶します。

より キャサリン ブロック

掲載日時 22 Jun 2015 - 編集日時 13 Jul 2015

カテゴリ：[記事](#) > [新改宗者ムスリムの逸話](#) > [女性](#)

私はこんなところで何をしているのでしょうか？ 私は、礼拝中に額と鼻を床に押し付けながらそう思っていました。膝頭は痛むし、額への重みを和らげようとする両腕の筋肉も突っ張っていました。隣で礼拝している人の奇妙なつぶやきを耳にしました。それはアラビア語で、彼らはそれを理解しますが、私にはできません。そのため、ムスリムになって僅か12時間目の私は、神がそれを聞き届けてくれることを望みつつ、勝手なことをささやきました。「神さま、私がイスラームに改宗したのは私があなたを信じているからで、イスラームが理にかなったものだと思ったからです。」そのとき、自分が言ったことが信じられませんでした。涙が止まりませんでした。ひざまずき、床に鼻を押し付けている私のこんな姿を友人たちが目にしたらなんて言うのでしょうか？ 彼らは笑い飛ばすでしょう。彼らは、私の気は確かか聞いてくるはずです。「あなたは宗教的になったとでも言うの？」宗教的 過去に、私は思弁的な無神論者であることに満足していました。どうして私は信仰するムスリムになったのでしょうか？ 私は自問していました。私は過去に思いを馳せ、自分がたどった道のりを思い出そうとしました。それは一体どう始まったのでしょうか？ それは多分、実践的なムスリムに始めて出会った時からでしょう。あれは1991年、カナダのオンタリオ州、キングストン市のクイーンズ大学での出来事でした。



私は偏見のない、寛容的で、リベラルな24歳の女性でした。インターナショナル センター付近を歩くムスリム女性を目にすると、可哀想に思えました。彼女らが抑圧の対象であるということを知っていたからです。彼女らになぜ髪の毛を覆い、夏場でも長袖を着、ムスリム諸国で悪い仕打ちにあっているのか尋ねたところ、「ベールをまとっているのは神がそう求めているから」と答えたため、彼女らへの哀れみの念は増すばかりでした。ムスリム諸国での仕打ちについてはどうなのか聞いたところ、それが彼らの文化だということでした。私はこうした女性に対しての邪悪な処遇について、彼女らが惑わされ、幼少の頃から社会的に洗脳されているのだと確信しました。しかし、私には彼女らがとても幸福そうで、友好的かつ堅実であるようにも見えました。次に、ムスリム男性をインターナショナル センターで見かけました。

「テロリストの地」リビア出身の男もいました。彼を見た時は、「神の名のもとに」私に何かしてこないかと身震いしたものです。神の名のもとに、暴動の中ブッシュ大統領の写真を燃やすアラブ人たちの姿をとらえたテレビの映像を覚えています。大層な神を持ったものだ、と私は思っていました。神は我々弱い人間を擬人化したものに過ぎないということ

確信していた私は、そんなものを信じれる人々がとても可哀想だとも思いました。しかし、彼らは非常に友好的なことに気付きました。彼らは人助けが大好きでした。彼らからは平静のオーラが見て取れました。一体どのような信仰を持っているのだろうかと思いました。しかしそれには困惑させられました。私はクルアーンを読んだことがあったものの、そこからは何も特別なものを見いだせていませんでした。それは湾岸戦争当時です。一体どのような神が、人々を戦争に駆り出し、他国の無実の市民を殺し、女性たちを暴行し、米国に対してデモをさせるのだろうかと疑問に思っていました。

彼らがその行いを代行していると主張させる、その神の聖なる書を読んでみるべきだと私は思いました。信頼できるペンギンクラシックス（ロンドンの出版社による教書）を読んでもみると、あまりにも酷い内容で読み終えることができませんでした。そこには誠実な者のための処女たちのいる天国（誠実な女性は天国で処女たちとどうすればいいというのでしょうか）、そして数々の都市を破壊する神がいました。

女性が抑圧されているのも当然だなと思いました。これらの狂信者たちはあちこちで米国旗を燃やしているのです。ただ、そのことをムスリムたちに話すと、彼らは困惑します。彼らのクルアーンにはそのようなことは書かれていないというのです。私が読んだものは誤訳だらけだったのでしょうか？

突然、私と一緒に礼拝している人が立ち上がりました。私は彼女に追従しているので、一緒に立ち上がるものの、長いスカートを踏んづけてしまい転びそうになりました。涙を抑えようと鼻をすすりました。神への礼拝に集中しなければなりません。神よ、私がここにいるのは私があなたを信じているからで、キリスト教 ユダヤ教 イスラーム ヒンズー教 シーク教 仏教の研究においてイスラームが最も理にかなっていたからです。

両手を両膝に置いて屈みこみ、お辞儀の姿勢になって、気を持ち直そうとしました。神よ、私を良きムスリムにしてください。「ムスリムですって？ キャサリン、教養ある西洋の白人女性であるあなたが、女性を二等市民に格下げするような宗教に改宗するなんて一体どういうことなの！」

でも、キングストンのムスリムたちは友達になってくれたのです。彼らは質問することなく、コミュニティに温かく私を迎え入れてくれました。私は彼らが抑圧されたテロリストであることを忘れませんでした。それが私の旅路の始まりだったと言えるでしょう。しかし、私はまだ無神論者でした。あるいはそう思い込んでいました。

私は星のきらめく夜空を眺め、宇宙について考察しました。ダイヤモンドのような星々は、暗い夜空をつらぬく神秘的なメッセージを私に送っているかのようでした。私は自分の存在よりも大きなものをつながったような気がしました。それは人間の集合的意識だったのでしょうか？ 平穏と静寂が星々によって運ばれてきました。私はこうした感情をねじ曲げ、より大きな存在、より大きな意識などないと宣言すべきでしょうか？「神の存在について疑ってみたことはないの？」私は信仰するキリスト教やムスリムの友人たちにこう聞いたものです。彼らは「ない」とこたえました。ない?? それは私を困惑させました。

神の存在って、そんなにはっきりとしたものなの？ なぜ私にはそれが分からないの？ 私にとって、それは想像力の飛躍でした。どこか遙か遠くの存在が、私の生活に影響を与えているというのです。いかにして神は、何十億もの人々の祈りを聞き届け、人間の人生の毎秒を司るというのでしょうか？ そんなことは不可能です。それはいわゆる「造物主」なのかもしれませんが、人に干渉するはずがありません。世界中で起き続ける不正についてはど

うだというのでしょうか？ 子供たちも戦争で殺されています。正義の神がそんなことを許すはずありません。神は理解不能でした。神が存在するはずなどないと思っていました。私たちは進化したのだから、造物主という概念も除外しなくてはなりません。

私たちは再び跪き、私は鼻をすすりながら、新しい緑色の礼拝用敷物の上で、自分の指を見ていました。この礼拝用敷物は私のお気に入りです。それは滑らかな肌触りで、緑の背景に紫のモスクが刺繍されています。そこにはモスクの黒い入り口へと続く道があり、私を招き寄せているかのようです。モスクの入り口には、ぼんやりではあるものの、確固たる真理があるかのようです。私はその入り口に招かれて幸福です。

私は幼い時に世界地図のジグソーパズルを持っていました。それは学部生の3年目か4年目の時にバラバラになってしまいました。キングストンで、私は一時は定期的に教会に通っていました。そこへ行くことは多少恥ずかしいことでもありました。宗教的な人々は感傷的だったり、風変わりだったり、古風で退屈な人々ばかりだったということもあります。しかし、当時は神の存在も自明のものと思えました。宇宙は全能である創造主なくしては全く意味をなしませんでした。

教会から帰る時は、身が軽くなり、幸福感がありました。そうした気持ちはもう失ってしまったと思えました。それは、今はもうなき神との関係を構築できていたからなのでしょう。実際には、それが旅路の始まりだったのかもしれませんが。私はその後も祈ろうとはしましたが、極めて困難になっていました。キリスト教徒は、主イエス キリストを信じない者には破滅の運命が待ち受けていると主張します。しかし、イエスについて聞いたこともない人々や、他の宗教に従っている人々はどうなのでしょう。また、キリスト教はイヴが罰を受けたことから、社会的には女性が劣った存在だと歴史的に主張してきました。女性は勉学、投票、土地の所有から阻まれてきました。神は長く白い髭をたくわえた、恐ろしい老人でした。彼とは話すことができませんでした。私はキリスト教についていけず、それゆえ神は存在しないことにしてしまいました。

しかし、私は神を信じるフェミニストや、フェミニストのキリスト教徒女性、またイスラームは私が信じていたような信条を持ってはいないことを主張するムスリム女性などと出会いました。私は祈り始め、自分自身を「キリスト教後のフェミニスト信仰者」と呼ぶことにしました。

キャサリン ブロック カナダ出身の元キリスト教徒（下）

説明： 真理を見出す努力の末、彼女はイスラーム改宗へと導かれます。

より キャサリン ブロック

掲載日時 22 Jun 2015 - 編集日時 22 Jun 2015

カテゴリ： [記事](#) > [新改宗者ムスリムの逸話](#) > [女性](#)

私はあの身軽さをまた感じ、ひょっとするとやはり神は存在しているのではないかと思いました。慎重に人生の出来事を検証してみると、偶然や運が神による祝福であったものの、私はそれに気づかず感謝すらしていませんでした。私自身は忠実でなかったにも関わらず、

神は常に優しくしてくれていたのです。私の耳と足はお清めによる洗浄によって心地さを感じていました。それは私を清め、神への礼拝をできるようにするものです。

神は実に素晴らしき存在です。私は畏敬と驚異の念を抱き、平穩を感じました。どうか正しき道をお示し下さい。「世界は偶然の産物にしては複雑過ぎ、美し過ぎ、調和を保ち過ぎではないの？」「それは進化の過程の産物ということを目撃的に信じてしまっているの？」「科学は神への信仰へ立ち返りつつあることを知らないの？」「そもそも科学とイスラームはお互いを否定すらしていないことも知らないの？」 私は自分の空想の中の陪審員に腹を立てました。彼らはこうしたことすら調べていないのでしょうか？

ひょっとすると、これは最も決定的な道なのかもしれません。ラジオのインタビューである物理学者が、いかに近代科学が19世紀の物質主義的な仮定を棄てたこと、そしてとても多くの現象が、知的設計論なくしては全く説明のできないという見解を持っていることを説明していたのを覚えています。科学の実験は単なる物理的現象の消極的な観察ではなく、観察は物理的現象の発生を可変するものであり、それゆえ知性が宇宙における最も原理的な法則であるかに見えました。

私はさらに読みました。実質的に進化論を依然として信じているのは、頑固な人類学者だけで、彼らは失職することへの恐れから、誰もそのことを声高に指摘しないということを見ました。私のジグソーパズルは崩れ始めました。

「じゃあ、あなたは神が存在するということに決めたのね。あなたは一神教徒だった。でもキリスト教も一神教なのよ。それをあなたは受け継いでいるの。なぜ棄教するの？」まだこれらの疑問は払拭できていませんでした。「でも、あなたはこれが最も回答の簡単な問題だということを理解しなくちゃならないのよ。」私はにこりと笑いました。

バイブルは科学に反しているものの、クルアーンは違うことを知りました。私はバイブルの物語を文字通り解釈したかったものの、そうすることはできないと知りました。科学的な事実は、バイブルの記述を反証します。しかし、科学的な事実はクルアーンの記述を反証するどころか、ときには説明の付かないクルアーンの章句を説明すらします。それには驚愕しました。

河川の水が海に流れ込む際、海水とは混ざらないという記述の章句がありますが、そこでは的確な説明がされている上に、惑星の軌道についても言及されています。7世紀の科学は、これらのことについて全く無知でした。ムハンマドの比類なき叡智はどういったことなのでしょう？ 私の心はクルアーンへと惹かれていましたが、私は抵抗しました。

私は再び教会に通い始めたものの、行くたびに涙を流すことになりました。私にとってキリスト教は辛いものでしかありませんでした。たくさんの方が理にかないませんでした。三位一体論、イエスが神の化身という概念、神へ直接ではなくマリア、聖人、イエスを通して崇拝することなどが代表的なものです。聖職者は、神について考える時は理性を棄てなさいと言いました。三位一体論は理にかなわないのはもちろんのこと、そうなるよう設計されたものでもありません。私はさらに掘り下げてみました。最終的には自分の文化、伝統、家族を棄てることなどできっこないと思いました。そんなことをすれば、誰一人として理解しようとはしないでしょうし、私は孤立してしまいます。ただ良きキリスト教徒であるよう努めるべきかも知れないと思いました。

私はさらに多くを学ぼうと心がけました。復活祭がイエスの死から数百年後に制定され

たものであるということ、またイエス自身は一度たりとも神の化身などと主張したりせず、たびたび「人の子」としてあり、三位一体の教義もイエス後300年経ってつくられたものであること。さらに私が毎週、一語一句に集中しつつ信仰深く唱えていたニカイア信経が、イエスが神の子であるという立場を政治的に確定させる少数派の会合によって書き記されたものであるということを知りました。そこでは、イエスが神の使徒であるという多数派の見解が、永久に抹消されたのです。

私は怒りを抑えることができませんでした。なぜ教会はこういったことを教えてくれなかったのでしょうか。まあ、その理由はわかっています。人々は、どこでも神を崇拝することができるという理解しており、そこでの崇拝は理にかなったものだからです。私は3つの神ではなく、父でも子でも聖霊でも、主イエスや聖人やマリアでもない唯一の神を崇拝しました。ムハンマドが真の使徒であり、クルアーンは神の言葉ということはあるのでしょうか？ 私はクルアーンを読み続けました。

そこには、樂園追放の責任はイヴだけにあるのではないこと、イエスが使徒であること、不信仰者は信仰者を嘲笑うこと、人々はムハンマドに下された啓示の正統性を疑うものの、それと同等の信頼性 安定性 合理性のあることを書こうとしても失敗に終わることなどが記されていました。それらは真実だと思いました。イスラームは神について考察する際には知性を駆使することを求め、知識の探求を勧め、信仰する者（ユダヤ教徒／キリスト教徒／ムスリム等）は報奨を受けると告げます。それは至極包括的な宗教に見えました。私たちは再び立ち上がり、両手を両膝に置いて屈みこみ、お辞儀の姿勢を取りました。他にも何か神に言えることはないのでしょうか？ 礼拝はとても短く感じられたため、十分に言えることを考えられませんでした。

一連の動作で息切れしてきたため、依然として鼻をすすりながらも、呼吸を整えようと思いました。「あなたは本当に女性を2級市民に貶める宗教に私が入信するとも思っているのですか？」私への尋問者に対し、私は返答を要求します。ムスリム諸国では欧米諸国同様、多くの女性虐待が行われているものの、それは真のイスラームではありません。そしてベール問題を取り上げないで下さい。女性がヒジャーブをまとふのは、神がそう求めているのだということを知らないのですか？ 彼女たちは神の言葉を信じているからそうするのです。

しかしながら、ヒジャーブを着ける勇気をどうやって奮い立たせるべきでしょうか？ 私は周囲から際立ち、人々から凝視されてしまうでしょう。私は外出の時には極力目立たないよう努める性格です。もしも友人たちに見つかってしまったら、一体彼らは何と言ってくるのでしょうか？ ああ神よ、お助け下さい！

私は変化の瀬戸際に数ヶ月もの間に渡って留まり続け、ジレンマは日に日に強くなっていきました。どうすべきなのでしょう？ 古い人生を棄て、新しいものを始めるべきでしょうか？ しかし、私にとって公の場でヒジャーブを着けることは不可能です。人々から凝視されてしまうでしょう。私は神によってもたらされた分岐路に立っています。私には、知性と共に心地よく同居する新たな知識があります。確信に従うべきでしょうか、それとも古き道に留まるべきでしょうか？ 人生において異なる見晴らしを持った時、留まることなどできるのでしょうか？ 新たな一步が耐え難く大きなものに映る時、いかに変わることができるのでしょうか？

改宗に必要な言葉を練習してみたりもしました。「唯一なる真実の神以外に神はなく、ムハンマドは神の使徒である」ととてもシンプルで、私はそれを信じています。ならば改宗す

れば良いものなのですが、私は抵抗しました。毎日毎日、私は終わりのない輪の中をくると回っていました。神は分岐路の片方で待ち構えていました。「キャサリンよ、来るのだ。私はここまであなたを連れてきたが、ここを渡るのはあなた一人でなければならない。」私は夜、車のライトに照らされて身動きできなくなったカンガルーのように静止して動けず、立ちすくんでいました。そして遂にある夜、神は最後のひと押しをくれました。私は夫とモスクの前を通りかかりました。耐え難いような感情が湧き上がりました。私の中の声は言いました。「今改宗しなければ、もう決して改宗のチャンスはないのよ。」それは本当だろうと思いました。「よし、やろうじゃないか。もしも彼らがモスクに入れてくれたなら、やってやろう。」しかしそこには誰もいませんでした。私はモスクの外の木の下でシャハーダを言いました。私は待ちました。私は即時の安寧、雷鳴のとどろきと、濃霧の晴れ渡りを期待しましたが、それはやってきませんでした。

以前と全く同じ感覚でした。私たちは再び跪きました。ここからは世界が非常に異なって見えます。有名なフットボール選手もこのように跪いていたなど、礼拝用敷物に垂れたヒジャブの切れ端を見ながら思いました。私たちは皆同じで、神の御前に等しく謙虚になります。そしてまっすぐに座ると、礼拝の先導者は何かの言葉をつぶやき、右手の人差し指を空で動かしています。私は再び敷物へと目をやりました。礼拝用敷物の緑、紫と黒の色調が安心させました。

モスクの入り口の黒色は私にこう告げます。「私はここにいます、落ち着いていれば私は見つかりますよ。」私の頬の涙は渴き、皮膚が引き締まった感じがします。私はここで何をしているのでしょうか？ 親愛なる神よ。私がここにいるのは私があなたを信じているからで、私はクルアーンの力強く威厳のある言葉を信じ、あなたの使徒ムハンマドの預言者性を信じているからです。私は心の中で、自分の選択肢が正しいものであるということを確認しています。私が強き信仰心によってあなたに良く仕え、この新たな自分と人生を歩み続けることのできる勇気をお与え下さい。私は笑顔と共に立ち上がり、礼拝用敷物を2つに折りたたみ、なめらかな緑色の確信との次回のお会いまでそれをソファアの上に待機させました。その時、濃霧は晴れ渡り始めたのです。

この記事のウェブアドレス：

<http://www.islamreligion.com/jp/articles/1824/viewall/>

Copyright © 2006-2015 www.IslamReligion.com. All rights reserved.